

「漂流する」

2016年10月07日

使徒言行録 27章 27節～38節 十四日目の夜になったとき、わたしたちはアドリア海を漂流していた。真夜中ごろ船員たちは、どこかの陸地に近づいているように感じた。そこで、水の深さを測ってみると、二十オルギアあることが分かった。もう少し進んでまた測ってみると、十五オルギアであった。船が暗礁に乗り上げることを恐れて、船員たちは船尾から錨を四つ投げ込み、夜の明けるのを待ちわびた。ところが、船員たちは船から逃げ出そうとし、船首から錨を降ろす振りをして小舟を海に降ろしたので、パウロは百人隊長と兵士たちに、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたは助からない」と言った。そこで、兵士たちは綱を断ち切って、小舟を流れるにまかせた。夜が明けかけたころ、パウロは一同に食事をするように勧めた。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてきました。だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。」こう言ってパウロは、一同の前でパンを取って神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。そこで、一同も元気づいて食事をした。船にいたわたしたちは、全部で二百七十六人であった。十分に食べてから、穀物を海に投げ捨てて船を軽くした。

パウロたちを乗せた船は、地中海の冬の嵐「エウラキロン」に襲われ、航行不能になった。人々は恐怖の中で、生きる望みを失い、食事も取れない状態になった。パウロは、船は失うが、誰一人命を失うことはない、神の守りの中にあると励ました。

船はアドリア海を漂流し、14日目の夜を迎えた。真夜中頃、船員たちは、どこかの島に近づいているように感じた。水の深さを測ってみると、20オルギアであった。1オルギアは1.85mであるから、37mである。少し進んで測ってみると、28mほどになっていた。だんだん浅瀬に向かっていった。船員たちは暗礁に乗り上げることを恐れ、船尾から錨を4つ投げ込み、夜の明けるのを待った。

ところが、船員たちは錨を降ろす振りをして小舟を海に降ろし、逃げ出そうとした。パウロは百人隊長ユリウスと兵士たちに、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたは助からない」と告げた。兵士たちは急いで、小舟を縛っていた綱を断ち切って、小舟を海に流した。人は自分の身に危険が迫れば、我先に逃げ出そうとするものである。主イエスが捕縛された時、死なねばならなくなっても、従いますと言った弟子たちは皆、蜘蛛の子を散らすように逃げ去っている。船員たちも乗船者たちを顧みることなく、自分たちは助かりたいと、逃げ出そうとした。パウロの察知によって、この危機は回避された。

夜が明ける頃、パウロは一同に食事をするように勧めた。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてきました。だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。」生き延びるためには食事をしなければならぬ。また、髪の毛一本もなくならぬ、命は神が守ってくださると励ました。パウロは、一同の前でパンを取って神に感謝の祈りを捧げ、パンを裂いて食べ始めた。パウロの落ち着いた様子に、一同も元気づいて食事をし、十分に食べて、元気を取り戻した。船に乗っていたのは、全部で276人であったというから大きな船であったことが分かる。船を軽くするため、穀物も海に投げ捨てた。彼らは生きることに向かって勇気を得た。